

『リュシアン・ルーヴェン』における 「未決定」の諸相

柏 木 治

小説『リュシアン・ルーヴェン』が、主人公どうしの情熱の比較から、『赤と黒』や『パルムの僧院』よりもむしろ『アルマン』に近親性をもつことは、すでに多くの論者が指摘している。実際、社会的上昇エネルギーに支えられて社会と対峙していくジュリアンや、衝き動かされるように行動へと駆り立てられるファブリスとは対照的な主人公の姿がそこにはある。このような主人公の性格類型は、スタンダールのあとの世代によって書かれた文学のなかに、より頻繁に見いだすことができるだろう。たとえば『感情教育』のフレデリックは、奇妙にリュシアンに似ている。「私はいったいこの世でなにをすればいいのでしょうか？ 他の人たちは富や名声、権力などのために必死になっています。でも私には地位などない、あなただけが私の心を占めているものなのです、私の全財産であり、私の生活の、考えの目的であり、中心なのです。」¹⁾

ピエール・ブルデュエは『感情教育』のこの主人公についてつぎのように言う。「フレデリック・モローは、二重の意味で未決定 être indéterminé の存在、あるいはより適切に言えば、客観的にも主観的にも未決定の状態にあるべく決定された存在 être déterminé à l'indétermination である。年金生活者という身分のおかげで自由を保証されている彼は、一見彼がその主体であるかのように見えるさまざまな感情にいたるまで、自分の金銭的な位置づけの変動によって左右されている。つまりこれらの変動が、彼のおこなう選択の方向づけを次々と決定してゆくのである。」²⁾

同じようにリュシアンは、まず小説の冒頭からどこにも属さない青年として、すなわち、学校からも追い出され、職にもつかない宙ぶらりんの状

態に置かれて登場する。かれは父の財政的庇護のもとに一見自由を享樂する未決定の存在である。未決定であるとは、自分の情熱を選択的に向ける対象が社会のなかにいまだ存在しないということだ。職もなく、信奉する明確な主義もなければ将来的目標もない。ほとんど否定的にしか定義できないこの青年の存在様態は、「欠如」によって満たされているといってもよい。「放校」は、その原因がいくぶん英雄的行動をにおわせるにしても、放校それ自体によってある種の情熱的行動集団からの離脱、もしくは乖離を意味している。実際、放校されたあとのリュシアンにとって、共和主義的情熱は過去のものでしかない。かといって、それに代わるあらたな行動の原理と目的が見つかっているわけでもない。「この幻想なき観察家[リュシアン]は、幻想を失う危険を犯すことすらなく、自分の周囲を見つめてなにかに激しく関心を寄せることもなく、ほとんど行動しない。舞台上に登場するやジュリアンは攻撃し、ファブリスは大砲へと駆ける。リュシアンはぐずぐずするばかりだ。シャストレール夫人に対して感じる愛情も、情念が通常スタンダールの主人公たちに与えるようなエネルギーを付与することはない。スタンダールの主人公たちはすぐに憤慨するが、かれは他人と自分自身を軽蔑している (...)」³⁾

エネルギーの欠如と存在の未決定状態に置かれた主人公は、自分の欲望の赴く先をいまだもたないがために、自らの意思でなにかを決定づけることはない。この小説は、主人公という中心において物語を進展させる積極的な動機づけを欠いているのである。したがって、欠如を中心に、その周囲にこれを補完するように、意図する人物たち、欲望する人物たちが配されている。欲望はひたすら周囲で蠢いているだけであって、主人公のそれとほとんど交叉することはない。ジャック・ロランが言ったように、「自分の周囲を見つめて激しく関心を寄せること」はないのである。かれの欲望ははじめから去勢されたかたちで表現されていると言っても過言ではない。

以下、リュシアンのこうした「未決定」状態の諸相を追いながら、そこに読みとれる意味を検討してみたい。

I 子供

一般に、社会的に「未決定」であるのは子供である。この小説には、主人公を「子供扱い」する場面が執拗に繰り返されている。リュシアンの社会的幼児性は、まず従兄デヴェルロワによる指摘から浮き彫りにされる。

A te voir, on dirait un enfant, et, qui pis est, un enfant content. (...) tu n'as pas de consistance, tu n'es qu'un écolier gentil. À vingt ans, cela est presque ridicule, et, pour t'achever, tu passes des heures entières à ta toilette, et on le sait. (LL, I, 98)⁴⁾

リュシアンが社会的に子供であるというのは、この小説の状況設定から当然といえるが、スタンダール自身も現実に小説を書く過程で、この青年を何歳に設定すべきか最後まで逡巡しているようすが見受けられる。そもそもリュシアンは何歳なのか。最初の原稿ではかれは二十三歳であった。それが口述筆記ののちに『緑の獵人』と題されて出版されることになるテキストでは二十歳に若返るのである。さきに引用した部分も、もとの原稿では「二十三歳」であった (A vingt-trois ans, cela est presque ridicule. (...)⁵⁾)。そのほかの例をいくつかひろってみてもいずれも第一の草稿では二十三歳で、口述筆記された原稿では二十歳になっている。

重要なことは、第一草稿から口述筆記への過程で、リュシアンを若返らせなければならない、つまり、いっそう社会的に子供として登場させなければならないという意識があきらかに働いていたという事実である。デヴェルロワのリュシアン批判はこのことを裏書きするかのよう繰り返される。

Et toi, monsieur le républicain, as-tu su gagner un centime en ta vie? Tu a pris la peine de naître comme le fils d'un prince. Ton père te donne de quoi vivre; sans quoi, où en serais-tu? N'as-tu pas de vergogne, à ton âge, de n'être pas en état de gagner la valeur d'un cigare ? (LL, I, 104-105)

Toi, tu n'es qu'un enfant qui ne compte dans rien, qui a trouvé de belles phrases dans un livre et qui les répète avec grâce, comme un bon acteur pénétré de son rôle; mais, pour de l'action, néant. (...) M. Filloteau fait peut-

être vivre son père, vieux paysan; et toi, ton père te fait vivre. (LL, I, 105)

リュシアンは、このような厚い庇護のもとにあって、みずからの意思と欲望によって行動に立ち上がることをしない。社会の客観的視点（ここではデヴェルロワのそれ）から見たとき、この青年は二十歳をすぎた「子供」でしかなく、現実の行動においてはまったくのダメ人間（néant）にすぎない。それどころか父に対して自分の子供ぶりを抵抗なく誇示する始末である（Je n'ai jamais gagné par mon savoir-faire le prix d'un cigare; sans vous je serais à l'hôpital, etc. (...) Que serais-je sans vous? (LL, I, 105)）。

かれが入隊を決意をするのも、内なるなにかがはじけたからではない。依然として未決定状態のままそうするのである。デヴェルロワの批判的な評価があつたにしても、先の引用が少尉になってからの言葉であることを考えると、かれの軍隊入りはほとんど成り行きにすぎない。事実、考えていることといえば軍服の色であり、さもなければ戦争で怪我をして可愛い娘に介抱される、あるいは宮仕えの女と出会うといった甘いロマンティックな夢に浸るばかりだ。かれの軍隊入りは毅然とした自己決断によるものではない。

このことは、小説が第二部にすすみ、リュシアンが内務大臣の秘書としてその能力を発揮しているかにみえるときでも基本的に変わらない。一方で大臣を手玉に取るような行動を見せ、そうすることでこの七月王政下のブルジョワ社会で一人前の大人を演じようとしているのだが、まさにそうした行動にでる自分自身に違和感と居心地の悪さを感じているのである。

Maitre des requêtes となったリュシアンがはじめて大臣に紹介される日の朝、父は息子の服装を「若い」といって咎めるし⁶⁾、「若く見えること」(ton air si jeune)⁷⁾の欠点を見抜き、精神的に純真すぎることも心配している⁸⁾。いっぽう、リュシアン自身も、ことあるごとに自分の「未熟さ」を認める言葉を吐く。プロワで泥まみれになるエピソードが書かれている章でも、コフを相手につぎのように漏らしている。

Que devenir? manger le bien gagné par mon père, ne rien faire, n'être bon à rien! Attendre ainsi la vieillesse en me méprisant moi-même, et m'écriant : « Que je suis heureux d'avoir un père qui valut mieux que moi! »
Que faire? Quel état prendre? (*LL*, II, 232)⁹⁾

このように、リュシアンは軍にしようがヴェーズ内相の片腕として政治的陰謀の渦中にしようが、あたかも社会的存在として認められることに抵抗するかのように、子供のイマージュとの重ね合わせが繰り返されるのである。主人公を「子供」の状態に留めおくこと——これは、リュシアンの行動の道程を追ってもしっかりする。『赤と黒』では、第一部はヴェリエール、ブザンソンの神学校をはさんで第二部ではパリが舞台となっていた。この間、ジュリアンは社会の現実と対峙し、時間の蓄積を経験の蓄積として処世の知恵へと変換していく。最終的には自分が築き上げたものをみずから破壊してしまうにせよ、小説は教養小説的な形をとっている。ところが『リュシアン・ルーヴェン』はどうだろう。この小説はパリから舞台が始まり、第一部は東部ナンシーで展開する。第二部ではパリへと戻ったリュシアンが、こんどは西部ノルマンディー地方へと赴き、再びパリへと戻る設定になっている。そして、イタリアへと向かう場面で、この小説は未完のまま終わる。ところで、この道程をとおして主人公が成長するということもなければジュリアンのように何かを自分で勝ち取っていくこともない。現在は過去を糧とし、現在は未来を養い育てるものだが、ティエリー・グワンも指摘しているように、この小説のなかにはそうした人生の時間的行程というものがなく、ただ現在の継起があるばかりで、ひとつひとつの現在は互いに打ち消しあっているかのようなのだ¹⁰⁾。ジュリアンとリュシアンが読者に残す印象のもっとも大きな違いがここにある。『感情教育』のフレデリックが「成功への意志」の欠如によって彩られていた¹¹⁾ように、リュシアンもまた、おのが欲望の対象を見いだせぬまま、成長をやめるかのような状況におかれているのである。

II ナルシシズムと退行

こうしたリュシアン的狀況の説明にフロイトを持ち出すつもりはないが、スタンダールの小説においては、口唇性への退行現象を思わせる場面に遭遇することがしばしばある。『アルマンス』のオクターヴにおいてもこの口唇的ファンタズムが色濃くあらわれていることはすでに指摘されているが¹²⁾ (性的に不能であるものが性器的ファンタズムから口唇性へと後退するのは当然だろう)、リュシアンにもそうした口唇性への退行と読める部分が少なからずある。

まず、鏡に姿を映して酔う場面が数ヶ所にわたってある点を挙げることができる。スタンダールの青年たちはみな様にナルシスト的であり、この点ではジュリアンもファブリスも例外ではないが、たとえばファブリスのナルシシズムは攻撃性と結びついている点でリュシアンやオクターヴのそれのように静態的でない。ジレッチとの喧嘩で、文字どおりナルシシクな外傷 *blessure narcissique* とでも呼べそうな事態が引き金になって、ファブリスはわが意に反してこの旅芸人を殺してしまう。そしてその場面にもやはり鏡は登場する。

« À la douleur que je ressens au visage, il faut qu'il m'ait défiguré. » Saisi de rage à cette idée, il sauta sur son ennemi la pointe du couteau de chasse en avant. (...)

Il le regarda au visage, Giletti rendait beaucoup de sang par la bouche. Fabrice courut à la voiture.

— Avez-vous un miroir? cria-t-il à Marietta.

Marietta le regardait très pâle et ne répondait pas. La vieille femme ouvrit d'un grand sang-froid un sac à ouvrage vert, et présenta à Fabrice un petit miroir à manche grand comme la main. Fabrice, en se regardant, se maniait la figure:(...)¹³⁾

この引用箇所のキーワードは「顔」である。visage、fugure、défigurer、pâle、se regarder、miroir など、畳み掛けるように繰り返される言葉は「顔」そのものか、さもなければ換喩的に「顔」に関わる語ばかりである。しかし、

ここでのナルシシズム的な自己への配慮は、その文脈からしてひとりの女性〔しかも多分に性愛的な〕をめぐっての決闘によって惹き起こされた近いものであって、オクターヴにおけるような口唇的ファンタスムへと退行したかたちでのナルシシズムとは根本的に様相を異にするとすべきである。〔妥当か否かは別として、ミカエル・ネルリッヒはファウスタの章に言及しながら、ファブリス自身の顔を男根としてとらえている¹⁴⁾〕

では、リュシアンはどうか。まず冒頭から父は息子をこんなふうにかうかう。

Savez-vous, lui disait-il un jour, ce qu'on mettrait sur votre tombe de marbre, au Père-Lachaise, si nous avions le malheur de vous perdre?

« *Siste viator!* Ici repose Lucien Leuwen, républicain, qui pendant deux années fit une guerre soutenue aux cigares et aux bottes neuves. »

Au moment où nous le prenons, cet ennemi des cigares ne pensait guère plus à la république, qui tarde trop à venir. (LL, I, 96)

パール・ゴリオをパール・ラシェーズ墓地に見送ったあと、そこから社会に対して挑戦の決意を吐くラスティニャックとはまったく逆に、大金持ちの家庭で不自由なく育ったリュシアンは小説の冒頭から父によって冗談半分に擬似的な「死」を宣告され、パール・ラシェーズに葬られている。社会と対峙することなく、父権の傘下で息苦しさを感じつつもそこに安住する様子が暗示されているといつてよい。もっとも、墓碑銘からすると、一見リュシアンは政治的主張をもっているかに見えるが、すぐそのあとで話者はこれを打ち消している。共和国を夢想した青年は、足場をしっかりと現実^{レアル}に置く父親からの愛情に満ちた揶揄の対象となって、いまでは社会的現実からは遠い家庭的雰囲気^{アットモス}のなかに置かれている。つまり、経済的には父に護られ、その父の圏域のさらに内側に形成されている母の社交界に身を落ちつけているという点で、かれは二重に保護されているといつていだろう。

Comme ses parents ne cherchaient point à le trop diriger, Lucien passait sa vie dans le salon de sa mère. (LL, I, p. 96)

Les dîners que donnait M. Leuwen étaient célèbres dans tout Paris; souvent ils étaient parfaits. Il y avait les jours où il recevait les gens à argent ou à ambition; mais ces messieurs ne faisaient point partie de la société de sa femme. (LL, I, 96)

言い換えれば、リュシアンは父を外堀に、母を内堀にして、その内部に自分の疑似社会空間を作り出しているのである。リュシアンのまわりには政治的言辞が散りばめられていて、それがためにこの小説は時としてほかの小説以上に政治小説的にみえるのであるが、少なくともリュシアンの政治的判断は、こうした二重にまもられた非政治的な場所から、外部世界を眺めた印象にすぎない。どのような政治的立場をとろうが、それが直接彼自身の生活の基盤に影響することもなく、したがってその政治談義はほとんど経験と生活の地平に根を下ろしていないといつてよい。

ところでこの未決定状態は、葉巻・煙草という語がテキストに喚起されることで、二重の意味で補強されているかにみえる。ひとつは、煙草銭がかせげないという経済的独立の欠如をとおして、いまひとつは「葉巻に火をつける」「葉巻をふかす」という行為の執拗な繰り返しが口唇性への退行を想起させてしまうという点において。実際、少尉リュシアンの政治問答は、口唇的退行の症候のみなざる自室で行われるのである(おそらく葉巻・煙草は、理工科学学校の学生、さらには大ブルジョワの子息という社会的な暗示を含んでいるのだろうが、この小説にあつて「葉巻をふかす」という行為は、たんに付随的な暗示として考えるだけではすまされないほど繰り返し出てくる)。いくつか例を拾ってみよう。

(...) se disait Lucien en allumant gaiement un petit *cigare* qu'il venait de faire avec du papier de réglisse à lui envoyé de Barcelone. (LL, I, 101)

Sa *lèvre*, en exprimant le profond dégoût, laissa tomber le petit *cigare* sur le beau tapis, présent de sa mère; il le releva précipitamment; c'était déjà un autre homme; la répugnance pour la guerre avait disparu. (LL, I, 102)

(...) continua-t-il philosophiquement en rallumant son *cigare*; (...) (LL, I, 103)

このように、母親が「息子が風邪をひいた日に、自分の寝室からはがして息子の部屋に敷かせた」「豪華なトルコ絨毯」の敷きつめられた自室で、かれは葉巻を何度もふかしながら自己問答を繰り返している。まるで母からの贈物に身をつつんで口唇的ファンタスムのなかで遠い外部を見やっているかのようだ。かれの軍服は、自身の決意を鼓舞するものでもなければ外部への足がかりを暗示するものでもない。閉ざされた空間のなかでそれを身につけた自分の姿を想像する、あるいは鏡に映してみるためのものではない (Quoi qu'il en soit, dit-il tout à coup en essayant l'habit et se regardant dans la glace, ils disent tous qu'il faut être quelque chose. Eh bien, je serai lancier; quand je saurai le métier, nous verrons. (LL, I, 103))—— こうした行為は、いわばミメティックな欲望のメタファーであり、行動として外部に超出することを前提にしていないという意味で自己完結的である。「ぼくはなにも世間にもとめてやしないのですから。」¹⁵⁾とリュシアンはいう。では、そのかれがナンシーに向かう連隊に入隊するという事実はどうだろうか。すでに触れたように、ここでもやはり確固たる動機はない。

(...) réellement, je ne suis sûr de rien sur mon compte; ma tendresse n'a réussi qu'à choquer mon père... Je ne l'aurais pas deviné; j'ai besoin d'agir et beaucoup. Donc, allons au régiment. (LL, I, 107)

父への愛情を吐露して父を当惑させたことへの反省から、父に喜んでもらうために入隊を決意をしたのであって、父からの独立を意味するものではまったくなく、その依存性を逆に物語っているといっても過言ではないのである。

ナンシー到着の翌朝、リュシアンは早速フィロトー中佐のところに出かけ、母から言われていたように中佐を晩餐に招くが、中佐は断る。しかし中佐は、「翌々日になると、火皿が海泡石でできた、どっしりと重い、みごとな浮彫の銀製パイプ」¹⁶⁾をリュシアンから受け取ることになる。興味ぶかいことに、フィロトーの手にわたったパイプはもはや口唇的ファンタスムを匂わせるものはなにもなく、外部の経済的価値体系のなかにしっかりと組み込まれている。それは経済的に計量化される銀に等しく(「そっくり銀

でできたパイプの目方を手で計りながら)、金銭の代替物にすぎない(「借金でもあるかのように」)。そして吸われることのないまま、ひきだしの奥にしまわれるのである¹⁷⁾。

このように、理工科学校を放校されると同時にリュシアンは政治的現実からも投げ出され、いわば口唇的ファンタスムの内部へと放出されるのである。この内部ではすべてが未決状態であり、したがって「子供」状態であり、社会的・経済的には父に、心理的には母の愛情に囲い込まれている。リュシアンの政治談義は、閉ざされた自室の窓の外遠くに垣間見える現実への、経験的足場のないコメントにすぎない。

Ⅲ 口唇的交歓

ナンシーでのリュシアンが依然として家族、とくに父の影響下にあることはあきらかであって、しかもその影響力を彼自身が「窒息」する思いで受けとめているというよりは、むしろそのこと自体当たり前であるかのように、幸福のうちに受けとめているかにみえる。

このような状況に置かれた青年の女性観および恋愛は、当然のことながら通常のかたちをとらない。リュシアンの恋嫌い、女嫌いの性格を思わせるいくつかの箇所は措くとしても、ナンシーを舞台とする第一部のもっとも中核をなすシャストレル夫人との関係自体が、二十歳の青年の通常のそれとはおおきく異なっている。いささか直接的な言い方をすれば、この恋愛は性器的な欲動に支えられた健全な発展の過程を進まず、強靱な父権と母性によっていつまでも子供状態に留め置かれた青年に特徴的ともいえる退行状態に終始する。そして、ここでも示唆的なのは葉巻の存在だ。リュシアンと夫人のあいだに交わされるつぎのような不可思議なミメティスムはいったいどう説明されるべきなのか。少々長いが、関係する部分を引用してみよう。

Le jour d'une de ces rencontres, sur le minuit, Lucien était allé fumer ses petits cigares de papier de réglisse dans la rue de la Pompe. Là il continuait à se réjouir de la faveur que les uniformes brillants trouvaient auprès de

Madame de Chasteller. (LL, I, p. 246)

A dix heures et demie, en le voyant arriver dans la rue, sa tristesse sombre et morne fut remplacée par le battement de cœur le plus vif. Elle se hâta de souffler ses bougies et malgré toutes les remontrances qu'elle se faisait à elle-même, elle n'avait pas quitté ses persiennes. Ses yeux étaient guidés dans l'obscurité par le feu du cigare de Leuwen. (LL, I, 298)

(...) Leuwen qui, bien loin de se douter de tout le succès de sa démarche, venait passer des heures entières dans la rue de la Pompe. Bathilde (car le nom de madame est trop grave pour un tel enfantillage), Bathilde passait les soirées derrière sa persienne à respirer à travers un petit tuyau de papier de réglisse qu'elle plaçait entre ses lèvres comme Leuwen faisait pour ses cigares. Au milieu du profond silence de la rue de la Pompe, déserte toute la journée, et encore plus à onze heures du soir, elle avait le plaisir, peu criminel sans doute, d'entendre dans les mains de Leuwen le bruit du papier de réglisse que l'on déchire en l'ôtant du petit cahier et que l'on plie, quand Leuwen faisait son cigarito artificiel. M. le vicomte de Blancet avait eu l'honneur et le bonheur de procurer à Madame de Chasteller ces petits cahiers de papier que, comme vous savez, l'on fait venir de Barcelone. (LL, I, 310)

リュシアンは夫人の住むラ・ポンブ街に足を運んで葉巻を存分に吸う。これは幸福の時である。同時に夫人は、奇妙にもリュシアンのそれを真似て甘草紙のまるめたものを唇にくわえて幸福にひたる。この場面は性器愛的な解釈を施してしまいそうな箇所であるが¹⁸⁾、ここでの両者の関係は、口唇的ファンタスムの無上の快樂にひたっていると考えるべきであろう。夫人はもはやレジティミストの最右翼としてのシャストレル夫人ではなく、バチルドとして姿をあらわしていることに注意したい。バチルドとは、スタンダールの愛人クレマンチーナの若くして死んだ娘の名である¹⁹⁾。さらにそれを証すかのように「こんな稚戯に等しい行為 *enfantillage* に夫人という名前はまじめすぎる」と、作者自身ことわりを入れている。この

enfantillage という言葉がバチルドという名を呼び起こしたことはいうまでもない。ここには「子供」を想起させる言葉と文字どおりの口唇的雰囲気のみちあふれているのだ。いずれにしても、直接的接触のない、それでいて聴覚とそれによって喚起される触覚の快感に身を委ね、両者は同じひとつの口唇的ミメティズムのなかで交歓するのであって、両者の恋愛が口唇的欲望に支えられていることを物語るひとつの *symptomatique* な場面として読むことができるのである。

さらにこのことをよりいっそう雄弁に物語るのが、デュ・ポワリエ医師の陰謀であろう。「子供」のようなリュシアンがこの陰謀によってシャストレル夫人の架空の「出産」に立ち会わされ、偽物ではあるが実際の赤ん坊をみせられて、かれの口唇的恋愛は一挙に崩れ去る。性器的欲動の結実というべき現実の「子供」の存在、これは口唇愛的ファンタスムのなかに生きていたリュシアンにとってみればまさに「とつぜん恐ろしい真実 (*l'affreuse vérité*) が顔をのぞかせた」²⁰⁾に等しく、かれはそのままナンシーから逃走するほかなくなるのである。逃走して向かう先はまたしても母親のもとだ。

« Il faut que j'aille à Paris à franc écrier, voir ma mère. » Ses devoirs comme militaire avaient disparu à ses yeux, il se sentait comme un homme qui approche des derniers moments. Toutes les choses du monde avaient perdu leur importance à ses yeux, deux objets surnageaient seuls: sa mère, et Mme de Chasteller. (*LL*, II, 89)

恐ろしい真の現実を目の当たりにしたかれが慰安を求めて行き着く先、それはやはり母親なのである。子供として口唇的夢想のなかに安んじられることを許す存在としての母。ここに現れる二つの対象、すなわち母親とシャストレル夫人——もちろん出産する夫人ではなく、あのバチルドのことだ——は、実際にはほとんど同一の対象である。こうしてリュシアンのナンシー追放は成就されることになる。

ナンシーからパリに帰ったリュシアンがまず身を落ちつけることになるのは、父の設計になる「1834年の展覧会にも出品された、高さ8フィート

幅6フィートのまったく申し分のない鏡」が置かれた部屋であった。

Le cabinet où avait lieu la conférence entre le père et le fils venait d'être arrangé avec le plus grand luxe sur les dessins de M. Leuwen lui-même. (...) La cheminée de marbre blanc contre laquelle s'appuyait Leuwen avait été sculptée à Rome dans l'atelier de Tenerani, et la glace de huit pieds de haut sur six de large, placée au-dessus, avait figuré dans l'exposition de 1834 comme absolument sans défaut. (LL, II, 93)

小説の冒頭とおなじように、第二部のはじめに主人公はふたたび鏡の反射にまもられたナルシシク空間へと立ち返るのである。

姦通し、恋人に子供を生ませるジュリアン、あるいは人妻に子供を生ませるファブリスとは根本的にちがって、口唇的愛情のなかにしか生きられないリュシアンにとって「子供」は無縁である。あえていうなら自分こそが象徴的「子供」の座に位置すべき存在なのであって、その地位をおびやかす現実の「子供」はあってはならない存在である。

決定的にはどの党派にも与することなくみごとに政治的言説を操っているかにみえるリュシアンと、「ゆうに一、二ヶ月はたっている」赤ん坊を愚かしくも生まれだての赤ん坊と思いこみ、ナンシーから這々の体でパリに帰還して「お母さん、ぼくは馬鹿だ。名誉にもとるようなことはしなかったけど、それを別にしたら、この世でいちばんみじめな男なんです。」(LL, II, 456, note 147) と母親に訴えるリュシアン。この両者のあいだの、はかりしれないほどおおきな距離はなにを物語っているのだろうか。

IV スタンダールの状況

すでに見たように、リュシアンにおける口唇的退行の特徴は、未決定状態に係留された精神状態の症候的特徴として考えることができるわけだが、この未決定状態は、かれの政治性においてもっとも顕著にあらわれていることはいまさら言うまでもないだろう。この小説を「追放」の繰り返しの物語として読むことができることはすでに述べたが、最初の追放、すなわち理工科学校からの放校直後、かれはすでにおおきく政治（政治的な

るもの)から遠退いていた(「さて、かれの物語をはじめようとするいま、この葉巻愛用者はなかなかやってこない共和国のことはもうほとんど考えていなかった)。ナンシーにおいても、表面的には現体制を支える若き少尉であるものの、いくぶんかは共和制に共感をよせ、また同時に旧体制にも郷愁をおぼえながら、そのいずれにも与することはない。そして共和制に関する自問自答のはてに行き着くのは、「(...)自分でもなになにになりたいのかよくはわからない。ただ、来る日も来る日も、母親のサロンのようなところに入りびたっていたら楽しいと思うだけだ。」(LL, I, 363, note 140)といった、じつに他愛のない結論である。スタンダールはリュシアンについてこう書く。

Jeune, riche, heureux en apparence, il ne se livrait pas au plaisir avec feu: on eût dit un jeune protestant. L'abandon était rare chez lui; il se croyait obligé à beaucoup de prudence. (LL, I, 161)

一見闊達にみえて、じつは去勢された者のように、かれは欲望の欠如のなかにおり、行動して現実のなかに足場を見出すことをしない。「できるだけ少なく行動すること、これが作戦計画だ」(agir le moins possible, le plan de campagne.)²¹⁾と自分に言い聞かせているように、かれの存在様態は、欲望しないこと、意志しないこと、行動しないことであって、この否定性のなかに全存在が掠め取られているといってもいい。

ところでこの否定性は、スタンダール自身のなかにあるもので、リュシアンの政治的未決定状態はおそらく小説家自身の精神状態の反映である。1831年以降のスタンダールは七月王政に仕える官吏であり、それがために多大な精神的自制をみずからに課していた。自分の考えや思想を表明できないことは、ものを書く人間にとってはさまざまな欲求不満をもたらす。かれは体制内にいながら体制を批判することの論拠も自信も見出せぬまま、沈黙をみずからに強制しようとするのである²²⁾。

さらにスタンダールはこの間、念願のレジョン・ドヌール勲章を得ている。しかしながらこの勲章は、かれ自身が望んでいた外交官としての叙勲ではなく、文筆家としてのベールに与えられたものであった。この事実は

重要である。というのも、いくら勲章が乱発されていた時代とはいえ、文筆家として政府から公認されたわけで、それがゆえに本当に書きたいことには沈黙しなければならない状況に陥ったからである。この叙勲は、書くことの奨励と禁止を同時に命じるいわばダブルバインド的な拘束力をもってスタンダールに作用したと考えられる。『リュシアン・ルーヴェン』の草稿の多くはこの出来事〔1835年2月〕までに書き終えていたが、これがさらにつぎの段階、つまり仕上げの段階をうまく呼び起こさなかった一因として考えられるのではないか。よく知られているように、スタンダールは二段階に分けて仕事をする。まず物語の全体のエスキスを仕上げ、そのあとで肉付を施しながら細部を練り上げ、展開させるのであるが、この作品の場合、第一段階の仕事の実質は1835年3月までであって、第二段階に入ると仕事の質量がともに低下してくるように見受けられるのである。叙勲のあたりから、体調不良も重なって、スタンダールの仕事量は落ちる。そして口述筆記にかかりながらも九月法批准の知らせを境にこの小説は未完として残される運命をたどるのである。

以上は推論の域をでないが、いずれにしても周囲の状況は、領事職を放棄しないかぎり、自分を政治的に曖昧にしておかなければならない状況にスタンダールを追い込むように展開してゆく。このような状況に対して、おそらくスタンダールの心理的反応はふたつのかたちをとった。ひとつはエディプスの表面化である。クルーゼの表現を借りれば、「古い傷」すなわち「父に対する戦い」が「再び口を開けた」のだ。1833年の«*Mémoires de Henri B.*»にはつぎのような文がある。

Mon père avait assuré en 1814 à mon ami, M. Félix Faure, aujourd'hui pair de France (né à Grenoble vers 1782), qu'il me laisserait dix mille francs de rente. Félix grava cette somme sur ma montre. Sans cette assurance, j'aurais pris un état en 1814 : filateur de coton à Plancy, ou en Champagne, ou avocat à Paris. En 1814, j'allais m'amuser en Italie, où j'ai passé sept ans; mon père, à sa mort, m'a laissé un capital de 3 900 francs. J'étais alors amoureux fou de Mme D[embowski]. Pendant le premier mois qui suivit cette nouvelle, je n'y

pensai pas trois fois. Cinq ou six ans plus tard, j'ai cherché en vain à m'en affliger.²³⁾

すでにトリエステからスタンダールは「働かなければならない」自分の運命を嘆いているが、この運命の原因をつくってしまったのが他ならぬ破産した父である。かれはべつのところで「破産する父をもつという不幸をこれほど感じたことはない」とも言っている。領事職の憂鬱、やり場のない孤独と絶望のはげ口を求めて、「もし十分な遺産年金があればこのような官職に甘んじることはなかった」という思いとともに、それを許さなかった父親に攻撃の矛先を向けるのである。他方、この父親に対する憎しみは、父親を攻撃することにしかはげ口を見いだせない自分自身に対する嫌悪とも入れ替わる。さきの《Mémoires de Henri B.》の書き方にもそれが特徴的に見いだせる。つまり、父が一万フランの年金を保証した年、自分はイタリアに遊びにいったことを書き、父が死んで3900フランしか残さなかったとき、マチルドに恋していたことを書く。現在の金銭的苦境のもとをつくったのは父だが、その時その時にすべきことをしなかった自分を後悔しているようだ。この一文は、父を攻撃するところから、しだいに自己攻撃へとスライドしていくのが特徴的である。父を攻撃しつつも自己の無力を悔いながら過去を回想するという構造は、fonctionnaireとして禄をはむことによって体制に対する攻撃の手をゆるめることを選ばざるをえなかった状況と相通的である。領事として国王に仕えているかぎり（しかもかれは文筆家として勲章をもらっている！）、文筆家として批判を放つことができないという矛盾した状況。体制の内部にあっていかに体制批判をなしうるか——これははからずもスタンダールが提出してしまった問題であるが、まさしくその状況に論理的、あるいは倫理的根拠を与えることのできぬままに沈黙を強いられ、体制への、あるいは国王への反抗の矛を収めざるをえないスタンダールは、ロシア人の人物を生みだしては自分をそこに投影しつつ、ときにこれを自嘲的に戯画化するほかないのである。

父親と父なる者としての体制（国王）を安易に同一化することはできないけれども、このスタンダール自身の自嘲的な心理が小説全体に浸透し、

リュシアンは未決定性に大きく影響しているとは考えられないだろうか。皮肉なことにこの小説のテキストがスタンダールの響きを放つのは、リュシアンがもっとも屈辱的に、あるいはコミカルに描かれる部分である。フロアでリュシアンとコフが群衆に泥を投げつけられ、脱出するくだりはスタンダールらしい文章の快活さと速さとリズムを取り戻している。

ジュリアンが象徴的に父親殺しに成功したときから自分を理解するのに対し、リュシアンは自分自身の *paternité* を前方にむなしく追い求める。しかし「かれは鳥もちに捕らえられた鳥のように父のファンタスムに捕らえられている」²⁴。金をはじめとしてかれはすべての力を父から相続するが、それがゆえにただひとつ *paternité* だけは与えられない。リュシアンはどこまでも潜在的な存在 (*être virtuel*) であって男性的存在 (*être viril*) ではない。ファブリスやジュリアンのように「殺す」こともできなければ愛することもできない。そして、このふたつの能力の欠如によって、現実はかれにとっかかりを与えないのである。父親に対する原初的憎しみによってジュリアンは戦う人間になり、戦いの果てに真実に到達する。他方、リュシアンは戦いの、あるいは憎しみの欠如に苦しんでいる。ジュリアンは自分が自分に負っているものを知っているのに対し、リュシアンは父親の過剰なファンタスムのまえに、ほんとうは自分にこそ *paternité* が欠落しているのだということに気づかない。

小説『リュシアン・ルーヴェン』において、スタンダールは現実の社会と政治をふんだんに詰め込み、主人公はその渦中に放り込まれ、文字どおり政治の泥にまみれるけれども、その社会の、政治の泥が主人公の情熱に火を放ち、どのようなかたちであれ、その怒濤のなかに身を投げ入れていくことはリュシアンにはあり得ない。かれはどこまでも通りすがりの旅人にすぎないのである。

過剰な父のシーニュのなかで現実の父親が欠如しているこの状態は、精神分析的な比喻でいえば、エディプス以前の口唇愛的ファンタスムのもとへの退行ということになる。父の愛情に応えるためにナンシーに、そしてやはり同じ目的でカーンに、つまりリュシアンは父の欲望を生きるために

東に西に赴きながら、いずれも成功せずと同じ場所に帰ってくる。父と対峙し、反抗し、象徴的に父を殺さなければ永遠に自体愛的空間から離陸できないことをかれは知らない。青年がようやくこうした退行から解放されるのは、父親がほとんど主人公のように小説の前面に踊り出て破産へと向かうところからである。このリュシアン・ルーヴェンの状況には、この時期のスタンダール自身のどうしようもない心理的状況が絡んでいると思われるのである。

(本学教授)

註

- 1) G. Flaubert, *L'Éducation sentimentale*, Gallimard, coll. « Folio », 1976, p. 293.
- 2) Pierre Bourdieu, *Les Règles de l'art. Genèse et structure du champ littéraire*, Seuil, 1992, p. 20. (なお、訳文は石井洋二郎訳『芸術の規則』藤原書店、1995を参照した。)
- 3) Jacques Laurent, *Stendhal comme Stendhal, ou le mensonge ambigu*, Grasset, 1984, pp. 194-195.
- 4) 『リュシアン・ルーヴェン』からの引用は、*Lucien Leuwen*, Flammarion, 1982 (2 vol., éd. de Michel Crouzet) からとし、引用の末尾に LL の略号とともに巻数・頁数を入れる。なお、註欄においても、とくに断りがなくぎり同様である。
- 5) Cf. *Lucien Leuwen II*, in *Œuvres Complètes de Stendhal*, Cercle du bibliophile, 1967-1974, t. 10, pp. 7-8.
- 6) *LL*, II, p. 126.
- 7) *LL*, II, p. 142.
- 8) « Le pauvre Lucien sera toujours dupe de toutes les femmes qu'il aimera. Je vois dans ce cœur-là du fonds pour être dupe jusqu'à cinquante ans... » *LL*, II, p. 149.
- 9) コフを相手に自分の幼児性を自嘲するかにみえる箇所はほかにもある。Cf. *LL*, II, pp. 254, 269.
- 10) Thierry Gouin, *Stendhal aller-retour. Les romans d'un voyageur*, Presses Universitaires de Lyon, 1989, p. 87.
- 11) P. Bourdieu, *op. cit.*, p. 29.
- 12) 夫婦愛のかなり露骨な場面をみた直後、芝居半ばにしてジムナーズ座から出、レストランに入ってスープを飲むオクターヴに、ジャン・ベルマン=ノエルはこ

の口唇性を読みとったのであった。Jean Bellemin-Noël, *L'auteur encombrant : Stendhal / Armance*, Presses universitaires de Lille, 1985, pp. 46-47.

- 13) *La Chartreuse de Parme*, I, in *Œuvres Complètes de Stendhal*, t. 24, p. 320.
- 14) Cf. Michael Nerlich, « Sur la partition de *La Chartreuse de Parme*, ou l'épisode de La Fausta F*** n'est pas détachable », in *Stendhal « La Chartreuse de Parme » ou la « chîmetière absente »*, SEDES, 1996, p. 96.
- 15) *LL*, I, p. 99.
- 16) *Ibid.*, p. 107.
- 17) *Ibid.*, pp. 107-108.
- 18) Ph. ベルティエはこのミメティスムを « Bel exemple (...) d'une fellatio à distance » としている。Ph. Berthier, *Stendhal et la sainte famille*, Droz, 1983, p.204.
- 19) バチルドについての考証は、François Michel, « Bathilde Curial. Un enfant à travers l'œuvre de Stendhal », in *Études stendhaliennes*, Mercure de France, 1972, pp. 78-89.
- 20) *LL*, II, p. 88. 同様に、父から愛人をもつように言われるたびに、リュシアンは青ざめる。Cf. II, p. 64
- 21) *LL*, I, p. 162.
- 22) このあたりの事情については、拙論「自伝のなかの革命」(『文学論集』第47巻第1号、1997)を参照のこと。
- 23) *Œuvres intimes*, II, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1982, p. 974.
- 24) Maurice Guérin, *La politique de Stendhal*, Presses universitaires de France, 1982, p. 97.
(本稿は、平成10年度関西大学学術研究助成による成果の一部である。)